

「シニア海外ボランティア」

中村 良一

NAKAMURA
Yoshikazu

海外での仕事に 再挑戦

バチバチバチバチ。作業場にまばゆい光が飛び散る。ヨルダン北部、ジェラシユという町の職業訓練校で行われている溶接の授業。生徒たちの指導に当たっているのは、シニア海外ボランティアの中村良一さんだ。

20代前半のころ、海外の人々がどのような生活をしているのかを見てみたいと、3年間バックパッカーとして過ごした。

「中東の人々の暮らしを支える 職人を育てたい」

ヨルダン北部、ジェラシユにある職業訓練校で教鞭を執る中村良一さん。日本での40年にわたる職務経験を生かして彼が指導するのは、この国で需要の高い空調設備の修理技術だ。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1947年東京都出身。大学卒業後、空調設備の施工や修理などを手掛ける企業に就職。退職後の2013年3月から、シニア海外ボランティア（冷凍機器・空調）としてヨルダンで活動中。



電圧を測定する機器の使い方を説明する中村さん

1として世界中を旅した中村さん。アフリカでは現地に出会った仲間と一緒に旅をしたり、インド、ネパールにまたがるヒマラヤの山に登ったりと、現地の文化を肌で感じてきた。

帰国後は、職種を問わずにかく社会に出たいと空調設備の施工や修理を手掛ける企業に就職。3年目にはミャンマーの電話局に空調設備を取り付ける工事に携わった。「技術指導を担当したのですが、彼らの勤勉さと向上心の高さには驚きました。その時から、自分の技術で誰かの役に立てたらと思うようになったのです」。その後も、アジアや中東への出張を繰り返しては、若手の指導などを担当してきた中村さん。65歳で退職した後、再び海外で働きたいとシニア海外ボランティアへの参加を決めた。

生徒をやる気にさせる ベテランの技

配属されたのは、ヨルダンのジェラシユ職業訓練校。10代後半の若者を中心に約150人が通い、金属加工や配管の技術、服飾のデザイン、ホテルの接客などを学んでいる。中村さんは日本での経験を生かし、冷蔵庫やエアコンの組み立てや修理方法などを学ぶコースを担当することに。夏には気温が40度近くまで上がるヨルダンでは、これらの電化製品は生活の必需品。修理の需要が高く、きちんと技術を身に付ければ、就職にもつながりやすい。

まずは、同僚のアナス・カデリ先生の授業を見学させてもらうことに。この日は、機械整備の基礎となる電流の仕組みやエアコンが冷風を送る原理などを学ぶ時間だったが、生徒たちは携帯電話をいじったり雑談をしたりと、真剣に授業を聞いていない様子だった。「遅刻や欠席も日常茶飯事。遊び盛りのせ



a.「この部品は何と言うでしょう?」。エアコンの模型を使って部品の名称を覚える
b.溶接技術の指導風景。「若い生徒たちが熱心に学ぶ姿を見るとやりがいを感じます」
c.カデリ先生と一緒に指導案を練りながら講義を行っている
d.「少しでも安全管理を怠ると事故につながります」。軍手や防護メガネの着用を徹底させている

いか、勉強が嫌になって途中で来なくなってしまいう子もいるんです」と、カデリ先生は肩を落としていた。どうか彼らのやる気を引き出せないか。長年、海外で若者に技術を教えてきた中村さんは、こういう時には決まったある作戦に出ている。講義だけでは飽きてしまう。そこでカデリ先生と相談し、すぐさま実際に手を動かし、道具を使う実習を取り入れることにしたのだ。

「配線をつなぎ、電球を点灯させてみましょう!」いつもとは違う、真剣な表情を見せる生徒たち。うまくいかない場合は、中村さんがさかさ声かける。「順調にできていますよ。その一言だけで、生徒の表情が明るくなる。やる気を引き出すためのベテランの技だ。配線をつなぎ終え、いざ、スイッチを入れてみると、電球がパッと光った。「できた!」。みんなうれしそうだ。

「講義で得た知識をいかに効率よく実践で生かすか。その鍛錬を重ねることで技術が磨かれていくのです」と中村さん。ろう材を使って金属を接合する技術やパイプの加工方法など、一人一人の能力に合わせ、徐々に授業のレベルを上げていった。さらに中村さんは、課外授業も積極的に導入。冷蔵庫やエアコンの製造工場に連れて行ったり、他の職業訓練校と交流の機会をつくらせたりと、生徒たちに刺激を与える工夫もしている。

「入学当時に比べ、見違えるほど熱心に学ぶようになりまし。まだまだ身に付けてほしいことはたくさんありますが、彼らの姿には大きな可能性を感じます。ここで取得した技術を生かし、社会に大きく羽ばたいてほしい」と期待を込める。今日もまた、中東の地で未来の職人たちと共に、汗を流している。

